

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 黄 郁 蕾 (コウ イクライ; HUANG, Yulei)

論文題目 言語行為の選択と判断に影響する諸要因の階層性

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	玉岡 賀津雄
委 員	名古屋大学教授	杉村 泰
委 員	名古屋大学准教授	鷺見 幸美
委 員	放送大学教授	滝浦 真人
委 員	山口県立大学教授	林 炫情

博士論文の意義

本論文「言語行為の選択と判断に影響する諸要因の階層性」の意義は以下の3点に集約される。

第1に、Brown & Levinson (1978, 1987) のポライトネス理論 (以下、B&Lの理論) は、フェイス侵害リスクの見積もり公式であり、 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ で示される。相手との社会的距離が D 、力関係が P で、これらは明瞭な定義がされている。一方、 R_x は、男女差、文化差など残されたものをすべて含んでいる。ところが、比較文化的な語用論の研究 (例えば、井出, 2006) では、日本の文化的な特殊性を挙げ、B&Lの理論はアジア文化には適用できないと批判している。本論文は実証的な手法により、B&Lのポライトネス理論を支持し、この理論がアジア圏に所属する日本と中国にも適用できる普遍性のある理論であることを証明した。

第2に、B&Lのポライトネス理論の見積もり公式では、フェイス侵害リスクを予測する影響要因を、 D 、 P 、 R_x と、重回帰式のように並列に並べていた。しかし、本研究では、ポライトネス理論の影響要因の強さには違いがあり、それらが階層性を持っていることを、最新の統計手法である決定木分析 (decision tree analysis) で証明した。

第3に、B&Lの理論的な枠組みがかなり普遍的に適用できることはもちろんであるが、文化社会的な側面からは、これまで R_x は影響の弱い要因であるとされてきた。しかし、本論文では、 R_x の場面や状況がポライトネスに強く影響することが観察され、これを $R(\text{situation})$ の変数で示した。さらに、「助言で相手を恥ずかしがらせる程度」の負荷も R_x の一種と考えて、 $R(\text{embarrassment})$ も強い要因であることを指摘した。以上のように、これまで D と P が普遍的で強い影響要因であることを示した研究が多数みられたが、本論文では、B&Lの理論では雑多な変数の集りとして扱われてきた R_x の中でも、 $R(\text{situation})$ の「状況・場面」、 $R(\text{embarrassment})$ の「相手を恥ずかしがらせる程度」のようにポライトネスに強く影響する諸要因が含まれていることを示した。

博士論文の概要

本論文は、Brown & Levinson (1978, 1987) のフェイス侵害リスクの見積もり公式 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ を枠組みとし、3つの調査で社会的距離 (D)、力関係 (P)、 R_x の要因群が断り行為、助言行為、迷惑行為の選択と判断に与える影響およびその影響関係の階層性について検討した。その際に、雑多な変数の集りとして扱われてきた R_x の要因を、 $R(\text{situation})$ の「場面・状況」、 $R(\text{embarrassment})$ の「相手を恥ずかしがられる程度」、 $R(\text{linguaculture})$ の「使用言語と文化差」、 $R(\text{gender})$ の「性差」などの要因に分けた。3つの調査の概要は以下のとおりである。

調査1は、依頼に対する断り行為について、中国人日本語学習者 (中国語での回答と日本語での回答の両方) と日本語母語話者を対象に、相手との社会的距離の D 、力関係の P 、 R_x には2種類を設け、依頼場面としての $R(\text{situation})$ および使用言語と文化差としての $R(\text{linguaculture})$ の要因群が断り難さと相手への配慮に与える影響を決定木分析の一つである回帰木分析で検討した。分析の結果、断り難さに対して最も強く影響したのは社会的距離の D で、次に力関係の P と場面の $R(\text{situation})$ であった。また、

社会文化差や使用言語の違いの R(linguaculture)の要因についても検討したが、D と P よりも影響力が弱く、依頼場面によって影響の有無に多様性が見られた。以上のように、Brown & Levinson (1978, 1987) のポライトネス理論の見積もり公式は、フェイス侵害リスクを予測する影響要因を並列に並べていたが、本研究では、影響要因の強さには違いがあり、それらが階層性を持っていることを証明した。

調査2は、助言行為について、中国人日本語未習者、中国人日本語学習者（中国語での回答と日本語での回答の両方）と日本語母語話者を対象に、相手との社会的距離の D、力関係の P、Rx には3種類を設け、R(embarrassment)の「相手を恥ずかしがらせる程度」、R(linguaculture)の「使用言語と文化差」、R(gender)の「性差」の要因群が助言の難しさと助言行動の有無に与える影響を決定木分析で検討した。分析の結果、「助言する/しない」という行動面での選択は「助言の難しさ」についての判断を反映していることが分かり、助言の難しさの判断が高くなると、助言行動を諦める傾向が見られた。また、助言の難しさと助言行動を行うかどうかを決める要因には階層性がみられた。まず、相手を恥ずかしがらせる程度の R(embarrassment)が、助言行動の有無に最も大きな影響を与えていた。次に、社会的距離の D が強く影響した。親しい関係の相手に助言する際には、助言行動を気軽に行うことができるが、疎遠な関係の相手では助言行動を起こすのは難しい。これらの2つの影響要因の次に、P、R(linguaculture)、R(gender)が複雑に影響した。これまであまり重視されることのなかった Rx の影響が強いことを示した。

調査3は、迷惑行為について、社会的距離の D を疎遠、力関係の P を同等に固定し、Rx のみに焦点を当て、Rx を迷惑場面の内容の R(situation)、文化差と使用言語の R(linguaculture)の2つに分け、迷惑に対する注意の有無を加え、3つの要因群が社会的な迷惑場面における迷惑度の認知への影響を回帰木分析で検討した。調査の結果、迷惑行為の迷惑度認知に関して、まず迷惑場面の内容の R(situation)が強く影響した。場面により、注意する人と注意しない人に分けられ、文化差や使用言語の R(linguaculture)の影響は、樹形図では最後の階層となった。つまり、文化差や使用言語が影響しているものの、弱い影響要因であった。Rx の要因であっても、影響の強さに大きな違いがあることを示した。また、調査結果から、日本人は迷惑行為に対し、注意行動をとるかどうかに関わらず、感じる迷惑度が高かった。それに対して、中国人は感じる迷惑度は比較的低かった。さらに、中国人はそれほど迷惑と感じなくても、注意行動をとる傾向が見られた。

論文の評価

口述試験では、以下の点についてのコメントおよび論者との質疑応答があった。

1. 本研究では、決定木分析の手法を使ったことが特色である。樹形図では、諸要因が階層として示される。論文では、諸要因の影響の階層性について分かり易く書かれておらず、羅列的な記述に終始している傾向がみられる。そのため、諸要因の影響力の違いを階層的に明記して

欲しい。全体的な概要を書いてから詳細を見るという形式にすれば、影響関係の階層性が分か
易くなるであろう。そういう書き方で訂正して欲しい。この点については、論文全体について
加筆することにした。

2. 本研究の意義は、井出(2006)の批判にも拘わらず、B&Lの枠組みが適応できることを示
したことである。D, P, Rxの内、本研究では、Rxに特に焦点を当てている。しかし、文
化社会、言語については、影響要因としては弱かった。しかし、Rの中で、R(situation)の
要因が強いことが見いだされたのは、画期的である。この点を強調して訂正すれば、より良い
論文になるであろう。この点について、強調して訂正した。

3. B&Lの理論の枠組みでは、Rxという要因は大雑把過ぎると思われる。実際に、Rxは複
合的な要因であるとされており、あまり重要視されていない傾向がある。しかし、調査2では、
Rxを3つに分けて、詳細に検討している。そこで、「助言で相手を恥ずかしがられる程度」が
挙げられているが、この負荷の程度をRxの一種と考えても良いのではないだろうか。それな
らば、Rxの要因としてR(embarrassment)が見いだせたことになり、本研究の意義が高まると
思われる。この点について、強調して訂正した。

4. 第4章が入っている理由がもう一つ分からないとの指摘があった。日中テレビドラマの助
言談話の分析があることが、かえって本研究の論文の論理的な流れを阻害しているように思わ
れる。そこで、第4章は削除しても良いのではないか。また、それに合わせて、第2章の理論
的背景の発話行為理論についても削除して良いと思われる。削除して、簡潔にすることにした。

5. 学習者の語用論的転移について、学習歴は書かれているが、習熟度が転移にかかわってい
るのではないかという意見があった。しかし、本研究では、日本語能力そのものを測定してい
ないので、今後の課題とした。

6. 理論や先行研究の紹介で、本博論の著者が自分で読んで理解したのか、先行研究の著者が
主張しているのかが、分かり難い箇所があったので、もう少し区別して書く必要がある。この
点については、全体的に論文を訂正することにした。

7. 相手の「恐そう」とか「可哀想」とかなどの外見や心理的な状況も助言行為に影響すると
思われる。たとえば、転んだ人を助ける際に、その人が可愛い容姿の女性であれば、よろこん
で助ける人が多いのではないか。本研究では、それらの要因は扱っていないので、今後の課題
とした。

8. 断り場面については、対象により自然さを出すために、質問項目を微妙に変えている。これによって、多少の違いが出てくるのではないか。しかし、自然な状況を作るために、場面の微妙な違いを作るのは避けられなかった。

9. 相手の身体的なことについては助言し難いのではないか。別の内容であれば、助言のし易さが変わってくるのかも知れない。助言の種類によって助言行為が変わってくるようなので、もっと多様な場面を考えた方がよいのではないか。とりわけ、日中において大きな違いがでてくると予想されるような場面があるのではないか。この指摘は非常に重要であり、今後の課題とした。

10. 「語用論的転移」、「逆行転移」について詳しく書いているが、実際には、言語学習経験はあくまで一つ弱い要因として観察されている。したがって、諸要因の階層性の中で、どのような扱いになっているかをちゃんと明記してから、詳細について述べるようにしなくては、強い要因であると勘違いしてしまいそうである。この点については、説明を加えて訂正した。

11. 日本語能力による語用論的転移にどう影響するかは興味のあるところである。日本語能力をどう考えるのか。この点については、本研究では日本語能力を測定していないので、あくまで日本語能力試験について触れる程度にまでである。やはり今後の課題とした。

12. 迷惑だから注意するのであって、注意するから迷惑であるというのではない。そのため、論文の書き方として、迷惑が先で、注意が後にくるのではないか。この点については、研究としては、迷惑度により注意の有無が左右されるという仮説をたてているが、注意の有無で被験者を分けてから、迷惑度の違いを検査している。そのため、分析の流れとして、この手順でしか検査できない。

13. 迷惑場面については、社会的距離（親疎）のDと力関係のPが統制されている。したがって、Rxの分析がし易いデザインである。Rxを検査したことを強調すると良いのではないか。そのようにすることにした。

14. 「注意しますか」、「注意しませんか」という0と1の変数ではなく、7段階とか5段階にすることもできた。この点については、行動を起こすか起こさないかであり、0と1の変数と考える方が明瞭ではないかと考え、そのようにした。

15. 研究課題（research questions）が調査の初めに書かれていないので分かりにくい印象であった。しかし、最近では、研究課題を仮説的に記述することをしない傾向があり、必ずしも

明記しなくても良いのではないかと思う。その代わりに、目的と問題設定を明記することが多いようであり、そのように訂正した。

16. 転移については、あまり強い影響ではなかったようである。中間言語語用論の話しが出てくるが、本研究の理論的な枠組みにはうまく当てはまらないように思われる。そのため、この部分の記述は削除した方が良いであろう。削除して簡潔にすることにした。

17. 「断り」「助言」「迷惑」の3つの行為をなぜ取り上げたのかが分かり難い。バランスよく選んでるのであれば、それを明記して欲しい。初めの部分にこの点について加筆した。

18. 「断り難さ」と「配慮度」の2つの変数を立てることで何を意図したかが書かれていない。決定木の結果はほぼ同じであるため、2つの変数の違いの意味が伝わらない。ほぼ重なる結果であることについて議論すべきであろう。この点について、加筆した。

審査委員会による合否判定

以上のようにさまざまな指摘、改善点、今後の検討についての助言があり、それぞれの点について適切な回答が得られた。また、コメントに従って訂正を確認した。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。